

泉鏡花作

傘

全一章

こゝを　　―　　廣坂通り、縣廳前と言つて、目貫
の場所だけれど、颯と木がらしに落來る木の葉は、
今ごろ東京に散りしきる、柳、すぐかけの葉のやう
な町らしいものではない。すぐ界限は昔の家中、邸
小路で、庭はおのゝ廣し、例の公園に近いから、
其處に年經る密樹鬱林を吹拂つて、深山路の冬の風
情を其のまゝに、舞ひかゝつて、ぱら／＼亂れる。
風一條渡るごとに、此の大路を往來する人の數よ
りも繁く、空にも地にも吹散つて、空蟬のやうな櫛、
そめたる柞の葉が、はら／＼と、灰色の軒を渡るか
とすれば、吃驚するやうな朴の葉の大きなのが、小
猪のやうに、がさ／＼がさと濡地を這つて行く。

櫛、漆の小さな紅が、夢の紅梅のやうに、ちら／
＼とまじるばかりで、今年はもみぢには些と早い。

初霜もまだ置かなさうである。　　―　　で、此の凧

も、妙めうに生な暖まくて、そして、時とき々思／＼ひ出だすやうに時しく雨れが來きた。

「――朝あさ飯はんの後のち、少しば時らくして、私わたしは傘かさを借かりて旅りよ宿しゆくを出でた。其その時ときは、門かどの柳やなぎにも、松まつにも、前まへの小を川がはの水みづの流ながれと、音おとがして降ふつて居ゐた。「旦那だんなさん重おもたいでせうね。」と女ぢよ中ちゆうが言いつたが、姿すがたが優いうなためと、お買かひ被かぶり下くだすつては恥はぢ入いる。さし手てが小こ男をとこで、「脊せの低ひくい處ところへ番ばん傘がさの太ふとい大おほいのに、女ぢよ中ちゆうが同どう情じやうをしたのである。成なる程ほど大おほき。唯と、杵きねを抱だいたほどある。開あけたり窄すばめたり、次ついで手に化ばけたりもしさうな、煤すす色いろの此この古ふる傘がさの、しかし轆ろくろ轆ろくろのまはりに、輪わにして藤ふぢの花はなを繞めぐらしたが、墨すみ描がきの葉はも、藍あゐ色いろの枝えだも、はや冬ふゆざれたのを、婆ば娑さと鬢さきして、件くだんの流ながれの板いた橋はしの破われ目めを渡わたりかけた、外ぐわい套いたうを被きた男をとこは、栗り鼠すが葡ぶ萄たう棚なを傳つたふに似にて居ゐる。送おくりだちよ女ちゆう中ちゆうを、ちよろりと見み返かへつて、「地震ぢしんよけに成なるね、瓦かほらが落おちても大だい丈じやう夫ぶだ。」と、情なさけなや、うつかり臆おく病ひやうを顯あらはすと、「あら、旦那だんなさん、雪ゆきの用よう心しんに丈ぢやう夫ぶにしてあるのですよ。」と言いつた。

まつたく、雪ゆきを凌しのぐための巖がん乘ちやうさである。私わたしは忘わす

れたのではない、敢て番傘には限らない、土地の女
たちが半ば伊達に持つ蛇目傘さへ、骨の太さは皆同
じである。

馴れないと、一廉荷に成る。半分は珍しく、面白
さに、此を眞直に翳して、其處等の裏町、細小路を
あつちこつち、格子戸に竹の子傘の雫を切つて、此
頃とれさかる小鯛を賣る魚屋の、値が出来たか、以
前に變らず紺前垂の眞田の紐から失立を抜いて、起
身で帳面をつける處だの、破門の片扉に半身で、御
新造が鰯を買ふと、此方に、南瓜被りで菅笠のまゝ、
大股に蹲み込んで、「しよツノ、しよツ、」と
銀色に青光る小鰯を數ふる状だのを、視めながら、
歩行くうち、大粒な雨かと思へば、落葉で、もう小
雨に成つて、大通りへ出たのであつたが。――

擦違ふほどでもなく、また寂しいほどでもない。
三々五々に往かふ人たちに、ふと何心なく氣が着く
と、一人々々、傘の持ち方が……ハテナ不
思議と言つて可い。

こゝに、露を厭ふとも見えない女房の、裾短に、紺の鯉口を着たのが、手を恚う横に突出して、傘の蜻蛉の糸を指に掛けて、ぶらりと宙に釣つて行くのが来た。その横を行く、勤人らしい洋服は、小脇から胸へ掛けて、傘の胴中を引挟んでくと通る。轆轤を腰骨に押當て、柄を長く横すぢかひに突出して行く職人がある。其の文蜻蛉と柄を兩手に、胸前へ高く斜違に握つて、來やがれと、捻ぢて願卷にしさうな若衆。皿まはしのやうに掌に立てた小僧が来る。引擔いだのは三人五人、言ふまでもない。．．．．．希有なのは肩にとんぼをつけて、柄を斜に矢大臣の如く突立てたのがある、此がいゝ年をさつしやつた親仁さんで。．．．．．雨はもとより、ふは／＼と生ぬるい風に浮いて、傘はさしても翳さないでも可かつたのであるが、内端らしい娘さへ尋常に、柄をすばめて膝につけて持つのではない。袖を開いて大道へ横ざまに突つ張るのである。然うかと思ふと、制帽の學生の二人、肩と肩で並んだのは、一人が洋傘を疊んで、ずる／＼と引摺つて、一方の持った傘一つに相々傘で行くのである。あとへ續いたおなじ學生たちは、「猿が鐵砲かついだやれ擔いだ。」

と揃つて行く。在所から連立つて、ぞろ／＼出た婆さんの、おゝ辛度と、兩手を腰へ、傘の兩端を取つて、眞中でとん／＼屈腰をたゞくのくに、連立つて、按摩の川渡りと云ふみえで、頸窪に横に背負つて、杖をついた爺どのは、元氣だと（木）の字に見えよう、とぼ／＼として案山子の形がある。恰もこれが一叢深き樹立の梢に、空に眞白な十字を掲げた天主教の會堂の前を辿るのを見たのも妙である。

申すまでもないが、一人として人間の横に這ふのもなければ、空に飛跳ねるものもない。傘ばかりは縦横無盡で、雲の中を怪しく落來る木の葉の中に入亂れて、異類異形の體がある。

この土地で、昔から魔所だと傳へる、鞍ヶ嶽、黒壁谷の巖頭に天狗が居て、傘の印を結んで、市中を搔擾すが如き趣があつた。

「あゝ、傘の大地震だ。」

私は柿の實のあか／＼と色づいた、岐路へ避けて入つて、うつかり呟いて、そしてひとりで苦笑した。

思ふまい・・・地方はのん氣なのである。

以前、私は東京へ来たてに、言つたやうな傘の持
方をして、三代住んだ神田の叔父さんに引叱られた。
「江戸ぢやあ、そんな傘の持ちやうをしちやあ不
可え、往來の邪魔に成る。」

いかにも以てお説の通り。そんなのは往來のさま
たげにも成れば、電車の中でも宙ぶらりんにぶら下
げて、揺れる度に振廻して、乗客の胸もつゞけば、
頬も叩き、目を搔拂ふ、厄介な連中に相違ない。

都會人は、傘の持かたに於て、一定の規律があつ
て、自然に謙遜の徳を備へて居る。然らざるものが
不作法に大手を振る。――と言ふのだ。が、神
田の叔父き、少し無理だ。此は傘が幅ツたくて、土
性骨の太いために、もちおもつて扱ひかねるため
である。

雪國だ。

焼原の住人が見ても、且つ同情すべきである。

なぞと言ふうちに、私も人を見ると、梢の柿を狙

つて居さうな持ちやうをして居て、また一人で笑つた。

けれども、其の餘りに目について、荒れに荒れたる傘の状は、天狗のなせる業ではなくとも、少くとも黒雲のふるまひだつた事が後に分つた。

もう其のうちに、大分風が出て、悪くなま暖いのがどツノと吹く。鬼川と言ふ、稱は凄じいけれども、旅店の前の流のつゞきで、もと其の川べりを學校へ通つた可懐い思ひ出のある、一方土堀きりで寂しい小川の處へかゝると、此方も、持おもりのした傘なりに、横ぶきに流の方へ吹つけられて、ぷら／＼歩行きには些と骨が折れ過ぎた。

さすがは城下だ。石段に、襟白粉のこまかに伸びた、島田鬚の葱を洗ふ姿が見えるほどだから、風に吹落されもしまいとは思つたが、すぐ宿の方へ引返した。

「お早いお戻り、……お歸りやす。」

「一寸、わすれものをしましたよ。」

半日、ぶらつきさうな様子で出たのが、ものゝ三分と経たないから、少々極が悪いため、なぞと言つて、「返すよ」と傘を女中に渡して、玄關の、繪が雲に龍、彫が波に兎といふ衝立の裏へ入つて廊下を渡つた。

家内は植込の松の硝子にうつる、明障子に、姿見に向つて、一寸容子のいゝ圓鬘に結つた髪結が鬢を撫でつけて居た處だつた。(註、容子のいゝのは髪結で。)

餘計な事だが、しかし此も道中記の挿畫の一枚である。但し自畫だから、ひどく拙い。

いや、そんな事は何うでもいゝ。やがて、ごろんと寝轉んだ。足を揃へて思ふ状伸した處は、さながら傘を倒した形だ。これに搔卷が掛つた。贅澤な傘だ。

目の覺めた頃、電話が掛つたのを、家内が取次いで、好な御馳走をしますから晩においでなさいつて、

と言ふ、私の従姉の家からである。

「雄ちゃんが電話に出ました。」

「あゝ、お嬢さんか。――五音の調子は何う

だい。」

これは従姉の惣領が、四五日のうちに、ある良家の娘と結婚する。――式もあらうと言ふので。……逗留の日取を延して、是非その披露目の席へ連るやうにと、相談を受けて居た處だから。

「いま時の若い方に、誰が女に、お嫁さんごときに、胸をどきつかせる人があるもんですか。――

お前さんぢやアあるまいし。」

「これは御挨拶だ。」

とゆひたての银杏返に、背中を向けて寝返りを打つて、

「五音の調子は亂れないでも、陽氣は些と狂つてるよ。それに大分風立つから、お光さん（従姉の名。）はふさいで居るぜ。あの元氣な人だが、

風吹と言ふと一も二もない、奥の佛間へ引込んで、夜具を引被つて寝るんだから可笑い。」

「然う、私たちの雷様の時のやうね。」
「不可いよ。船中　――　いや、道中にて、左様な事は申さぬものさ。」
しかし、惑いことを言當てた。

其の従姉の家へ行くのに、連立つて・・・雨は歇んで居たが、雲が暗いから、用心に件の藤の繪の番傘を一本だけ持つて出た。――　裏町の魚屋のたゞきに、さうめん鮎と言ふ此の土地の白魚が霜の如くちよぼ／＼溢れて、桶に、湯の鮎が押重つて雲の泡を吹く處は、朝夕、日中の時雨も、もうやがて霰の時節で、雪に近い。

その癖、變にまだ生暖く、黒雲は犀川の空に満ちた。白山はもとより、おなじみの醫王山、寶達ヶ峰、御前ヶ嶽、鞍ヶ嶽の尾も隠れ、片鎧も見えないで、不氣味に、灰汁で墨を和へたやうなのが、鯨の如く累つて動いたが、いま時分、まさか（鳴る）なぞとは思はなかつた。

おほどほ　大通りへ出て、太神宮様へお参りした。――

御手洗に預け申した、その番傘を小わきに、そこらに軒を並べた飲食店をうそ／＼と差覗いて、

「途中で何方々で見掛けたぜ。――到る處が

天麩羅だ。――此の頃此地ぢやあ、ひどくすき

に成つたものと見えるね。以前はなかつた事で

す・・・・擧つて天麩羅を嗜む、これ何の兆ぞ

や。」

と皆まで言はず、家内が袂を引いて、

「大神宮様で、説教は可笑いね。」

一言もない。元來天麩羅を驕るでもなし、何處と

言つて案内をするでもないから、せめて、先刻見た

往來の人の傘の奇勸さを、實地に説明をしようなぞ

と思つたが、目立つほど傘を持ったものは、今はな

い。續々通るお勤人は、皆洋傘で、いづれも、ひけ

時のお歴々だから失禮だと思つて黙つた。

いや果せる哉。従姉は、私たちが茶の間に入つた

のを見ると、奥の佛間の襖を開けて、引かぶつたば

さ／＼髪で、頸脚のいゝ人が、肩を押すくめて憤つ

たやうに出て來た。

「やあ果せる哉……」

と、くす／＼と行くと、従姉は、眉も口も一所にしかめて、睨むやうに顔を見て、

「勝手にお笑ひなさい。」

それ切、串戯も言はず、七輪を茶の間の隅へ持出して、大鐵鍋を掛けながら、

「何うも、臺所を引くり返して亂暴ですけど、火の用心が可恐うござんしてね。……風の吹きます朝は、子供たちに辨當も持たせません、皆麵麩なんですの。」

と家内に話し、話し、板昆布を一枚、鳶の羽のやうに投込んだ。ふツ／＼と煮立つ處へ、一升罌から、たぶ／＼と灌ぐ。

「酒しほだね、……あゝ、惜いなあ。」

「誰も飲せないとは申しません。——後でい

くらでも差上げますから。」

と又邪険に叱つて、

「何故でせうねえ、何處のでも、のみ手と言ふと、酒汐を惜しがりますのね。」

「意地いぢが汚きたうございますこと。」

へッ、高慢かうまんな顔かほで煙草たばこを吹ふかす。

薬味やくみの葱ねぎの香かが立たつと、め筈ざるに水みづを切きつて置おいた、雪ゆきのやうな魚さかなの切身きりみを煮にた。――これが、お約やく束そくの御馳走ごちそうの、鱈たらであつた。

「姉ねえさんのは焼やいた方ほう。――あなたのは、煮になくつては不可いけいから、その煮にた方ほう。……」

「鯛たひの尾頭をかしらつきだね。――御芳志ごほうし千萬ばんかた忝じけなく、……」

と反そつた魚やつを睨にらみながら、フツト湯氣ゆげを吹ふいて鱈たらの汁じゅうを頂戴ちやうだいした。――藏くらの前まへの地袋ぢぶくろをうしろに控ひかへて、食卓ちゃくだい臺だいで、熱爛あつかんで、いゝ男をとこの雄ゆうちゃんも加くははつた。

「兄にいさん、兄にいさん、兄にいさん。」

俄然がぜん、お光みつさんが茶ちやの間まから、けたゝましく、地ぢた踏ふ鞆らを踏ふんで來きて、

「はい、お熱あついの。」

と、身體から揉出すやうに、うつくしく、忙しく、
花火のやうな笑を溢して、

「あゝ、嬉しい。」

「何うしたの。」

と眞顔に成つて愕然とすると、雄ちゃんも、きよ
とんとした。

「風が止みましたよ、．．．．．」

と頭で掬ふやうに、私の顔を覗込んで、

「その、かアはアリい　ー　ー」

と、あゝ、氣味の悪い。前髪を暗く、おばけの眞

似．．．．．

「．．．．．ごろ／＼様が鳴つて來たわよう。」

「え、」

「敵が取れた。　ー　ー　あゝ、嬉しい。」

ざざつと鉢前にそゝぐ雨の中に、土藏の奥の方で、
ぐわうと吼る。

「海の、方からア、來ましたよ。」

鱈も、銚子もソレ背負つて行け、と私はぐたりと

して横に倒れた。雨は一息づゝ強く成る。雷が續いて鳴った。

雷鳴と、雨との中に、あらう事か、おほゝ、あはゝ、と従姉の笑ふ聲がすると、藏の中からどしんと投出した、――もう十一月だ、しまつてあるのは其の筈で――蚊帳の疊んだのを一つ枕にさせた。私は頭で噛りついた。

「おほゝゝほ。」
もう一つ持出して、かゞつたまゝで背中へ掛けた。私は引きしめた。……冷くつて、寒くつて、身ぶるひが出るが仕方がない。――までは可いが、尚ほ最う一張これに綱をつけて、天井の釘へ渡して、丁度倒れた奴の胸の上の見當の處へ、ざわ／＼ざわと釣上げた。

「兄さん、――御安心。」
何が安心、大な西瓜だ。いや、孤家の壓石だぞ。
「何うも……何とも、困つたお母さんだ。」
と、雄ちゃんが、止むことを得ず手傳はされたの

が、茶の間へ引退つて歎息をすると、中仕切に立つて、従姉が覗き込んで、

「それで、男振さへよければ自來也なんだがね、惜い事・・・」

成程、三くゝりの古蚊帳は、影を蟠らせて、皆大なる蝦蟆ある。・・・串戯どころか。私は血が冷え、膚粟立ち、地の底に領伏す氣がした。が、いっにつにない事、うと／＼した。一體三銚子ばかり立つて、既に陶然とした處だ。雷鳴もまだ遠かつた。且つは冬至を過ぎて居る。さしたる事もあるまいと思つた處へ。――勇氣のほどの違い、従姉の綱手が頼もしい。惣領をはじめ兄弟たちも、女まじりに自若として居る。いくらか恐怖を薄めたらう。

うと／＼しつ、東京で、地震の二日前の、あの可恐い中に、凄く艶だつた雷雨を思つた。――客が来て居た。客は話しながら、いつか蒲團を摺りつて、身もだえをするやうに、薄羽織と一所に袂を兩方、かはる／＼絞つて、腕を上げたり下げたり、帷子の膝を引張つたり、たくし上げたり、胸を開け

て脇の下を煽いだり、手巾で額を拭いたり、見て居ても辛さうだ。いや、見られる方も苦しいほど蒸暑かつた。その人の辭して歸つた、午後二時半と言ふのに、入道雲のまだ白いうちから鳴出した。甚だ身勝手だが、その熱くて辛い客さへ歸すのではなかつたと思つた。底意地の悪い、執拗い、長い雷で一、雲辛うじてごろ／＼とや／＼空を過ぎたと思ふと、むく／＼と湧出るやうに、ぐわら／＼と又鳴出す。夜の十一時まで鳴り續いた。時には一息吐く間もあつたが、十分とは間を措かず轟き渡つた。その長い時の中、飯も食はず、茶も飲まず、煙草も吸へない。

ー お恥かしい話だけれど、家内と／＼もに蚊帳ばかりを頼りにして、継ぎかへ、さしたす線香の煙の濛々と黒い中に、搔卷を被つて手足を縮めて、へと／＼に成つて、ぐつたりした。・・・夜の九時半頃がその絶頂で。ー またこんな夕立に限つて、蒸すばかり、鳴るばかり、光るばかりで、いきつく露に草の濡る／＼ほども降らなかつた雨が、忽ちどつと加つて、雷ははためき、電光は蚊帳を刺通す。突伏して居る身體が、つかみ立てらる／＼やうにわな／＼いた。

格子戸が颯と開いた。

勸音來り給ふと、夜具の襟に目を開いて蚊帳越に透かす、とバツと光る。あと思ふ電の影に――電燈は用心のためスイッチを消して置く――光の浅葱に影を照して、眞黄色な女郎花の花が土間の暗中に浮いた。その莖が、靡くやうに框の板に据ると、並んで、撓つたやうに、白地の浴衣のうしろむきに掛けた腰が見える。模様も帯も分らなかつた。

――が藤紫の切が明く映つて、雫の滴りさうな黒髪を、てんじんに結つて居る。瓜核顔の、夕顔の花の傾く状にほのめいたのが、瞬く間を、又射返した電光に、蒼いばかり、横顔も頸も色が白。おくれ毛も數へられた。

續けて五たびばかり、はたゝがみした。

「お上んなさい、お上んなさい、お入り下さい。」と息を切つて、然も、その、よくもわからぬ女性にさへ、救を求めて呼んだのは、雨も、雷も、一度にひつそりとした後だつたのである。

蚊帳の外に、――女中が水の流るゝやうに、
女郎花の濡枝を、一束もつて膝をついた。

「……………お客様がおつしやいます。――深川
川のものですが、大層不沙汰をいたしました。今日
は、玉川へ誘はれましたから、道草に、咲きました
のを、お土産に、あのお目に掛けます。……………
少々遠方へ参らねばなりませんし、お暇乞にお目に
かゝりたいのですけれど、吃驚して、不行儀に駈込
みましたやうな、こんな夕立ですし……………また
ひどく降りさうですから。……………それに、とも
だちが、つれが、あの、大勢、辻に待つて居ります
から、すぐに失禮をいたします。あの……………く
れ／＼も――とおつしやつて。……………」

女中は偉い、豪氣だ。……………ちゃん和大雷の中
で取次いで、氣丈に口上をつたへた。――私たちが
は、その間、人の歸るのも夢中で居た。

「お前さん。」

「うむ。」

と言つたばかりである。深川には、もう亡くなつ

たものゝ墓のほか、……さそくに然うした心當りの婦人はなかつたのである。

女郎花ばかり、色に出たが、うちはな吾木香も三本ばかり。――五草、六草……水引草の微な紅が、爪紅のやうに添つて居た。

わざと根やきをしないで活けた。そして白衣の勸世音の畫像を掛けた。

その翌々日、前日の雷が、一團、一塊に成つて、むらがり重つたかと思ふ入道雲が、白に、薄鼠に、錆びた色のへりを取つて、可恐しく、霸王樹の如く辰巳の一天に聳えた。――地震であつた。

女郎花は、崩れた壁とゝもに枯れたのを、そのまゝにしてあつた。――此の土地へ來るにつけて、思ひついて、桐油紙に包んで提げた。菩提寺の土にするつもりであつた。

住職に手を借りてと、訪れたが、それは留守で、ハイカラに結つたのが、赤い蹴出しで、會釋に出たから、何も言はずに卵塔の土を被せた。

それは、しかも昨日の午。と、うと／＼して居た。

ばち／＼ばら／＼と凄^{すこ}い雨^{あめ}まじりの霰^{あられ}の音^{おと}。うつゝ
が返^{かへ}つて目^めを開^あくトタンに、藏^{くら}の網^{あみ}戸^どが青^{あせ}く映^{うつ}つた。
思^{おも}はず、蚊^か帳^やを翳^{かざ}し、蚊^か帳^やを楯^{たて}に、蚊^か帳^やを抱^だいて、
ハツと起^おきる、と雷^{らい}鳴^{めい}とゝもに潜^く戸^{りど}がカラリと開^あい
た。――商^あ屋^{きな}だ^{ちや}が、店^みの土^ど間^まに、颯^{さつ}と、女^を郎^{みな}花^{なへし}が
五^ほ本^ん咲^さいた。・・・その莖^くから、枝^えから、葉^はか
ら、黒^{くろ}髪^{かみ}の亂^{みだ}るゝやうに、美^{うつく}しい色^{いろ}の雨^{あめ}が流^{なが}れた。

「おい、途^と方^{ほう}もない降^ふりだ。」

と、その眞^ま中^{なか}に、駈^{かけ}込^こみ状^{ざま}の傘^{かさ}を、ひろげたなり
で突^つ立^たつたのは、三^{さん}男^{なん}の十^{じゅう}三^{さん}の十^{じゅう}坊^{ぼう}である。

藏^{くら}の屋^や根^ねに、飛^と上^{びあ}つたやうな雷^{かみなり}は、臺^{たい}所^{どころ}の屋^や根^ねを
ぐわら／＼ぐわら／＼と暴^あれ^ばて行^ゆく。しかし、その
あとは、ひつたりと静^{しず}かに成^なつた。

「・・・雷^{かみなり}は絶^たえ間^まなく轟^{とん}き渡^{わた}り、雨^{あめ}は車^{しや}軸^{ぢく}
を流^{なが}すのであります。兇^{きよう}漢^{わん}は此^この機^きに乗^じじて、貴^き婦^ふ
人^んを奪^うはんといたします。しばらく畫^{くわ}面^{めん}の御^ご清^{せい}勸^{くわん}を
仰^あぐであります。・・・タツタラララ、タツタ
ラララ。」

と、膝^{ひざ}まで、たくしあげた洋^{やう}服^{ふく}の脛^はを、ちん／＼

もが／＼と踊りながら、夜學がへりの、その十坊は
雑巾で拭いて居る。

助かつた。茶の間も更めて陽氣に成つた。

私は熱い茶をのみながら、東京の・・・その
雷雨の時の話をした。

信心家の従姉が、息を詰めたのは言ふまでもない。

「そんな事は、ありませんまいがね。・・・今
度の地震で、深川でなくなつた人が、何うかしたわ
けで、此地へ歸りたくつて、まへじらせを、自分で
悟つて、お頼みなすつたかも知れませぬね

「・・・それとも、墓に居る人が、焼けること
を知つて、草葉の蔭でも、遁げたのかも知れませぬ
よ。」

「これ即ち、科學を超越したる不思議であります。
・・・タツタラララ、タツタラララ。」

と蟹の脚のやうな突張つた大胡坐で、片手づかみ
に、金鍰と、木のパイプを、ちゃんぽんに煙草を吹
かせる。工業學校の三年生は、兄弟中の豪傑である。
「なま意氣な口を利いて・・・お前、未成年

だからつてんぢやあないか。　　ー　　巡査さんに、
其の吸口を咎められたら、何と言ふんだ。　　・　　・　　・　　・　　・　　・
兄さん、呆れるぢやありませんか。　　ー　　急にひ
どい雨に成つたつて、臆面のなさつたら、交番へ飛
込んで、巡査さんに傘の世話をして貰つて来たんで
すとさ。」

「それ、警官の職たるやだね。　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・
人民を保護するのが。」

「お黙り。その。パイプを叱られたら何うするん
です。」

十坊は、胸を伸し、頤を張つて、蛸の嘯くが如く、
顔を皺だらけに眞仰向けに煙を吹した。

「衛生保健のため、此の器具を用ゐてです

な。　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・
ふるであります。第一巻の終り、　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・　　・
ラララ。　　ー　　東京の小父さん。」

と、けろりとして、
「僕のいま借りて来た傘に、女郎花が描いてあり

ますよ。」

と、澄すまして言いつて、又またけるりとした。

座ざは顔かほを見みあはせた。

「お巡まはり査ささんの曰いはくです。――今いま此この派は出しゅつ所じよに、保ほ護ご中ちゆうの一ふ婦じん人しよの所しよ持ぢした傘かさが爰こゝにある。交かう番ばんへ來きて傘かさをかせと言いつたのは、君きみがはじめてだから、試こころみに、本ほん職しやくの一ぞん存もんを以もつて貸かして遣やッ。が、今こん夜やでなうても、明みやう早そう朝ちゆうは必かならず返かへさんと不い可かんぞ。あゝん！と、そこで、町ちやう、處ところ、姓せい名めい、身み分ぶん、學がく校かうをきゝ／＼話はなしたんですがね。かくの如ごとき暗あん夜やをですね、傘かさをすばめて持もつたまゝ、どしや降ぶりにかゝはらず、それをさゝないで、髪かみから裾すそまで雫しづくを流ながし、うろ／＼と派は出しゅつ所じよの前まへを通とほる。……女を郎み花なへしの花はなが、宙ちゆうを傳つたふやうに、ハツキリ見みえた。美び人じんで盛せい装さうして居ゐるんぢや。裾すそ模も樣やうかと思おもつたら傘かさの繪ゑだ。と言いつてね。さすがに常じやう識しきを以もつてせざるを得えざる所ところの警けい官くわんも、一しゆ種しゆの奇き蹟せきに打うたれたらしく、獨ひとり思おもふにあきたらずしてか、僕ぼくに話はなしました。――狂きやう女じゆうである。……話はなのうちに、カートの奥おくで美び人じんのすゝり泣なく聲こゑがしました。寢ねて居ゐるのか、倒たふれ

て居るのか、足ばかりが板へ出て、紅い切れが血のやうに搦んで、眞白で、跣足でした。映畫は細い。悲嘆に胸を打つて苦むやうに、つまさきが震ふであります。……」

「十坊、十坊、その傘を見せないか。」

と、お嬢さんが沈んで言つた。

「ようし、きた。」

「あゝ、お待ち。――氣味が悪い。」

「私も凄い、可恐いんですもの。」

と家内も落すやうに煙管を置く。

十坊は、てれたやうに、堅くなつて、ごし／＼頸を搔いて居た。

わづか一日の事である。――披露の席には、罷出る約束して――歸りしなに、私がさきへ取つて、番傘の藤の花を開いた。よつて、他の女郎花の模様を確かめたのである。

雨は歇んで居たが、空合だから、家内は別に借りて出た。

雄ちゃん、十三が電車まで送つて來た。豪傑の

方は、空次第で、すぐにも遠走りに傘をかへすつもりで、借りたのを持つて先に立つたのである。

武藏ヶ辻と言ふので、夜更けた電車を待った。待つうちに、雨は、一しきり再び車軸を流した。

こゝに待合す人たちの、十二三人が一齊に、角の大問屋の、既に鎖した軒下に、雨を凌いだ、その傘の形は、澁も、油も、色こそかはれ、皆確と柄を両手に、廂さがりの俯向けに取つて、敵に向ふ楯の如く、槍ぶすまに似てそゞぐ雨に、張をば合せ、柄を揃ふる。．．．その中に、藤が搦んで、三つおいて、女郎花の蛇目傘が立つた。

颯と、生ぬるい風が強く吹添ふと、電車のまだ來ないうちに、雨は小歇をした。

が、大粒なのが、ばら／＼とかゝる。

「十坊、．．．その傘を一寸お見せよ。」
何故か、一人、傘をさしもせず、杖にして、軒に立つたお嬢さんが、仰々しいほど更つた聲を掛けて、線路へ出て、十坊のと持ちかへると、街燈に透しながら、恁うさし開いたが、次第に、その轆轤深く顔を入れた。

私は衝と寄つた。たしかに女郎花の繪を見たらば、一寸、家内には憚つたが、十坊をすゝめても、狂女を見舞はうと思つたのである。

其時であつた。

「玉とかいて、あツ（玉）とかいてある。」
言が、女郎花に、雲をもれた星の色を青く添へると、パツと風が、旋風のやうなのが、空へ颯と巻取つた。青いとんぼが、ひらくと屋根を行く。

「やあ、馬鹿兄、何をする。」

驚いたのは十坊で、球のりの宙乗の如く飛上る拍子に、傘は地にバサツと落ちて、名にしおふ武藏ヶ辻の、辻をかなたへ、くる／＼と地を摺つて舞つて飛ぶ。

「嫁で夢中だ。しつかりしろい。」

と高足駄を踏みならしながら、

「タツタラララ。」

と素飛んで追つて行く。

待合せた人々は、や、や、と聲を掛けながら、いづれも、思はず傘の柄を丁と取つた。

「小父さん。」

と縋るやうに、お婿さんが、悲痛な聲で、

「結婚はやめます、小父さん、僕は、玉と言ふく、
るとと、秘密に約束して居たんです。東京へ連れて
つて下さい。小母さん　ー　玉川へ身を投げま
す。」

もの狂はしい状であつた。　．．．．．赤燈の電
車、黒雲に乗るやうに來た。　ー　私は雄ちゃん
を連れて乗つた。

駈戻つて、女郎花ばかり一束にかついだ状の、十
坊の、泥田に鴛鴦の立つたやうな形を見ながら、
．．．．．赤電車と言ふがこゝらの景色にはそ
ぐはない。燈の桃色の電車にたよつて、薄い電光の、
次第に幽に成る影を、傘の藤を袖にして、旅宿に歸
る。

．．．．．わたしの友だちが　ー　此を話した。

【完】